

二〇一二年五月二日、ロシア・サンクトペテルブルグ市から、ロシア科学アカデミー東洋古文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員、ロシア国立歴史文書館アレクサンドル・ソコロフ館長、ロシア国立海軍文書館セルゲイ・チエルニャフスキー館長をむかえ、日露関係史料をめぐる国際研究集会を、史料編纂所と日本学士院(国際学士院)連合関連の日本関係在外未刊行史料調査事業の一環の共催により開催した。

通算十二回目となるこの研究集会では、以下の三報告があった。第一報告は、ロシア国立海軍文書館セルゲイ・チエルニャフスキー館長「ロシア国立海軍文書館史料にみられる海軍専門用語について」である。報告には詳細な海軍用語集が添付され、世界的に見て、遅れて創設されたロシア海軍がさまざまな外来の術語を取り入れていったことが紹介された。さらに十九世紀当時の航海日誌の様式とその変化について追加報告(本稿未収録)があった。第二報告はロシア国立歴史文書館アレクサンドル・ソコロフ館長による「ヤルトロフスタ市保存フォンド保管センターから返還されたロシア国立歴史文書館史料について」である。核戦争の危機にあった一九六〇年代末、当時のソ連は国内の文書館が所蔵する貴重史料の一部をシベリアへ疎開させた。これが近年原蔵館に復帰しており、歴史文書館では元老院文書を中心に書架に換算して四・三分の史料群が戻ってきたという。報告は「唯一無二の貴重な原本史料の内容を紹介し、その活用による可能性を示すものになった。第三報告は、ロシア科学アカデミー東洋古文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員から「一八六二年の日本使節団ドイツからロシアへの旅」と題し、現地の史料を用い、文久期の竹内使節団がドイツ、ベルリンから海路クロンシュタットをへてサンクトペテルブルクへ到達する道筋を詳細に明らかにした。荒れるバルト海で使節が口にしたのは日本から持参した米を炊いた秘伝のおかゆだったという。以下、この三報告を掲載する。

最後に、研究集会の実施にあたっては、ワジム・クリモフ研究員から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

(プロジェクト代表/保谷 徹)

ロシア国立海軍文書館史料にみられる海軍専門用語について¹⁾

セルゲイ・チエルニャフスキー

言語学では語彙の定義がいくつもある。その一つが、ある特定の分野で用いられている語の総体、つまり専門用語である。我々の場合、この特定の分野とは、海軍の職務であり、専門性と明白な特質を持つ。海軍任務に携わる人々が用いるこの専門用語は、日々の職業的語彙、さまざま

まな便覧、公的文書、文献の中で、実際に用いられている。ロシアの歴史において、海軍の役割と意義は、国家の発展と安全の確保のために極めて重要であった。祖国の海軍の創立と発展の途において、ロシア語語彙は、海軍専門用語に満ちている。その語彙は、海軍形

成史そのものはもちろん、海洋、航海、造船、造船、海洋と関連する人間の活動全般に関する専門的な知識をも反映している。

専門家によると、ロシア海軍専門用語の発達は、以下の四期に分けられると考えられている。

- 一. 一〇～一六世紀 ロシア語と若干の借用外国語を基礎とし軍事専門用語が形成される。
- 二. 一七～一八世紀 海軍専門用語の術語大系の基礎が形成される。
- 三. 一九世紀～二〇世紀前半 新海軍力と新軍事手段の出現と発達により術語大系が拡大される。
- 四. 二〇世紀半～二一世紀初 近代的要求に応じ海軍用語が近代化される。

海軍専門用語は以下のように分類される。

- 一. 船舶の名称と分類。
 - 二. 船舶機装、造船、船舶技術。
 - 三. 海軍の職階、階級、職務。
 - 四. 文書名。
 - 五. 船員活動の様相。
 - 六. 海軍の日常生活の名称、慣習・習慣の言い方。
- 海軍専門用語の特殊なものとしては、命令、合図、標語がある。

最初の航行手段をいかだとし、後には、一本の木をくりぬいて作った丸木舟を勘定に入れば、ロシアの造船の歴史は少なくとも六千年は遡ると思われる。スラヴ民族の分化は、河川や湖に沿って進行したが、そういうことが交易には最適と理解されたため、それ故、造船もまた

発達したのである。

造船経験と船舶の利用が増加するにしたがって、海運業の特質を有する海軍専門用語も形成され始める。初期において、海軍用語は、造船が為された現場である古代ロシアの言語を基礎として形成された。例えば、海軍用語の一つである《корабль》(ship, 船)という言葉は、ロシア国立海軍文書館文書にしばしば登場するが、祖国、スラヴ語起源である。疑いなく、祖国語起源である語には、《челн》、《челнок》(canoe, 丸木舟)も含まれ、これは、普通、マストが一本で、小さく、通常、くりぬかれ、あるいは、張り合わされた、キールがない小船である。もともと、ロシアでは、櫂製で、キールがあり、長さ一六メートル、幅四、五メートルの大型の丸木舟も造られている。

北方、シベリアの狩猟業者たちの使用する帆掛舟である《кожа》にも同じことが言える。《кожа》は、マストが一本、場合によっては二本、帆が一枚、帆と手漕ぎ併用の木製の船で、一七～一九世紀の間使用されている。《кожа》は初期は金属を使わずに造られている。マストがあり、舵には屋根が付き、櫂が複数ある。この舟の船体は水の圧力に抵抗することができる。《кожа》という言葉は、《кожа》、つまり、水の外套を意味する。すなわち、水で覆われている舟、という意味である。《кожа》は北方ロシアとシベリアで広く使われており、古くは、海辺で造られた。

バルト海、ラドガ湖では、小型の二本マスト、帆、手漕ぎ併用の船が造られ、《комка》と呼ばれた。長さは一二メートル以下、排水量は一五トン以下である。同様の船は、荷物運搬のために、ほとんど二〇世紀初頭まで使われた。

故国の造船、航海の歴史の初期に、船の名を除き、船の索具、海戦の遂行方法、武器の名称、武装艦船を象徴する名称等の特性を持つ言葉が出現した。

後になると、ロシアの船大工や船員たちは、造船用語や航海技能を外国から移入するようになる。

例えば、ビザンチン帝国のギリシア人から、ロシア語に専門用語が入ってくる。ギリシア語起源のもので、ロシア海軍で使われている専門用語は、фонарь (lamp, lantern, 提灯、街灯)、климат (climate, 気象)、магнит (magnet, 磁石)、хронограф (chronograph, クロノグラフ)、тетрадь (notebook, ノート)、планета (planet, 惑星、地球)、металл (metal, 金属)、история (history, 歴史)、математика (mathematics, 数学) 等である。

ラテン語はロシア語の語彙形成に大きな役割を果たしているが、海軍専門用語にも同様であり、ラテン語から海軍には、作戦や探検の言葉が入った。

スカンジナビアの諸言語、すなわち、スウェーデン語、ノルウェー語からロシアの船員が借用した言葉は以下の通りである。

шхеры (skerry, スウェーデン、フィンランドの海岸の呼び名) (海岸近くや湖の小さな岩島のこと)、岸壁が切り立って入り組んでおり、そのため航行にとり危険)、якорь (anchor, 碇)、крюк (hook, フック、釣針)、барор (hook, fishhook, halpooon=гарпун, もり、釣竿)。

フィン、ウゴール語からは、魚の名、たとえば、сиг (whitefish, ウスリー白鮭)、семга (salmon, 鮭科)、сакака (sprat, 鯀科の1つ)、сельдь (herring, 鯀)、акыла (shank, サメ科) 等が入った。

ゲルマン系言語からは、броня (armor, 甲冑、装甲)、котел (boiler, ボイラー、釜、機関) 等が入る。

チュルク系言語【トルコ、アゼルバイジャン、ウスベク、カザフ、キルギス、バシキール他、トルコ系諸民族の言語の総称】からは、衛兵、哨兵の単語が入った。

一六〇一七世紀、ロシア語海軍専門用語に対する欧米語の影響は、強まった。特に、この傾向が顕著になったのが、ピョートル大帝治世下である。ピョートルの時代は、我が国の生活、国家諸活動、すべての分野で、一連の根本的改革と革新が行われたという特徴を持つ。

ピョートル大帝(一六七二—一七二五)は、自己の治世のそもそも最初から、誰よりも早く、ロシアの発展の成功には、海への出口の確保が必要であり、その中でも、まず、黒海とバルト海であることを認識した。このことは、欧米諸国との結びつきを強める結果となり、海外交易をも活気付けることになったであろう。

当時、ヨーロッパロシアで唯一の港であるアルハンゲリスク港は、中央から遠く、道路がなかったため、必要事項である、この重要な課題の解決ができなかった。まさにこれらの状況こそが、一六九六年にロシアの正規海軍が創られることを運命づける。そのロシア海軍は、最初はトルコ、後には、スウェーデンと激しく戦う中で、海への出口を確保し、制海権を確立した。

我が国に正規のロシア海軍が創設されたことにより、新しい海軍専門用語も、当時のヨーロッパの諸言語から、突然大量に、借用されるようになった。海軍を創設するとともに、ピョートル一世は、外国からたくさん専門家を招聘する。それらは、イギリス人、オランダ人、デンマーク人、フランス人、ノルウェー人、その他当代の海軍大国の人間である。そして、その専門家たちは、自身の造船技術や海戦の経験ばかりでなく、たくさん海軍の伝統、さらには、ある程度、もはや、国際語になっていた、海軍専門用語を持ち込んだ。

ロシア海軍に入った外国借用語の量は極めて多いが、このことは、当時の我が国の海軍が、重大で強固な伝統を持っていなかったために起きたもので、まったく驚くに当たらない。同時に、海軍の発達は、新しい専

門用語、新しい表現であふれた、大量の記録文書、操典、訓令、法典を生み出し、それらは、実質的に、かつて、使われた言葉や表現にとって代わられていった。

ロシア語に大量に外国語が流入したことにより、外国語起源の語彙の専門辞典の編纂が必要となった。それらの内、最初の辞典は、ピョートル一世自身の参画の下に編纂され、「Лексикон vocabulorum novum pro adfavitu」（『新専門用語辞典』）と名づけられた。ピョートルは、原稿の余白に自己の註記と解説を付けている。この専門用語辞典は、極めて、内容が多岐に渉り、その中には、海軍専門用語が含まれる。皇帝は「Адмиральство」（海軍省）という言葉に、次のような解説をしている。「«Обращение правителей и урядовителей флота» 「海軍の総統制官庁」。「«Битва»（battle、戦闘）とこの語には «бой, сражение, битва»（三語ともすべて「battle、戦闘」を意味する語）と解説が付けられているが、後者二個の言葉には、下線が引かれ、「百人以下」と付け加えられている。しかし、それぞれの外国借用語、なかならず海軍専門用語には、ロシア語の中に類似の語彙がない。実は、まさにこのことが、大量の借用語を生むことになった主たる原因である。

«Флот»（fleet、海軍、艦隊、船隊）という言葉それ自体もフランス語から借用されたもので、ピョートル自身の手によって書かれたロシア海軍の海軍法典には、次のように記されている。「«Флот»とは、航海中、停泊中いかんにかかわらず、また、軍艦、商船を問わず、船舶の集合体である」、さらには「人員の階級階階は船舶のランクによる」と続く。この四三個の職階の内二五個が外国語起源の名称を持つ。

海軍用語の内、フランス語からロシア語に入ったものは、文書史料にしばしば見られるが、以下の通り。

авангард (avant-garde, advanced guard, アバンギャルト、前衛)、
артиллерия (artillery, 大砲、砲兵隊、砲術)、атака (attack, 攻撃、急襲)、
капитан (captain, カピタン、船長、艦長、陸軍大尉、海軍大佐、海軍中佐、海軍少佐)、лейтенант (lieutenant, 海軍大尉、海軍中尉、陸軍中尉、陸軍少尉)、салют (salute, サリユート、礼砲、軍旗掲揚、捧げ銃等による敬礼、表敬)、десант (landing, landing force, 上陸、上陸部隊、降下部隊)、эскадра (squadron, 艦隊、分遣隊)、рандеву (rendezvous, ランデヴー、船の合流点、会合点)、мортира (mortar, 臼砲、曲射砲)、пароль (password, countersign, 合言葉、暗号)。

ドイツ語から入った言葉は以下の通り。

командир (commander, 指揮官、司令官、艦長、隊長)、штаб (staff, 司令部、参謀本部、参謀、幕僚)、лафет (gun carriage, 砲架)、напрон (cartridge, 弾薬筒、薬莖、薬包、実包)、напронташ (bandolier, 弾薬帯)、вахта (watch, 当直)、галичвахта (guardroom, guardhouse, 営倉、衛兵所)、пейхгаз (storeroom, 兵器庫、軍需品倉庫)、штурм (assault, 強襲、襲撃、征服)

オランダ語からロシア語に入った言葉も多く見られ、それは以下の通り。

балласт (ballast, バラスト)、гавань (harbor, 港、港湾)、верфь (dockyard, shipyard, 造船所)、вымпел (penant, 軍艦旗、細長く先端が二股に分かれた国籍等を示す旗)、койка (cot, ハンモック、船舶の寝棚)、киль (keel, キール)、каюта (cabin, キャンビン、船室)、катер (launch, ランチ、小型船艇)、дрейф (drift, leeway, 流程、航差、風圧角、漂流)、帆船の浮流、浮遊)、матрос (sailor, マトロス、船員)、лотман (pilot, パイロット、

水先案内人)、『рейд (raid, roads, roadstead, 急襲、奇襲、錨地、停泊地)』、『рея (yard, ヤード)』、『руль (rudder, helm, wheel, control, 舵)』、『трап (ladder, タラップ、梯子、階段)』、『флаг (flag, 旗)』、『фартакер (fairway, channel, 航路、水脈、水路)』、『штурман (navigator, 航海士、舵手、操舵手)』、『шкитер (商船長、漁船長、掌帆長、甲板長=boatswain)』、『шлюпка (boat, ボート、船、小船)』、『яхта (yacht, ヨット)』等々多数。

英語からロシア語に入った海軍専門用語は、以下の通り。

бор (boat, ボート、船)、бриг (brig, ブリック艦、ブリック船)、баржа (barge, 舢舨、荷船、傳馬船)、『док (dock, ドック、船渠、造船所、海軍工廠)』、『шхуна (schooner, スクーター艦、スクーター船)』、『мичман (warrant officer, second sublieutenant, ミチマン、海軍少尉)』等々。
ロシアの軍服用語には、わずかだが、イタリア語の影響も見られ、arsenal (arsenal, 造兵廠、兵器庫)、『bastion (bastion, 稜堡)』等がある。

この外国借用語の一覧列挙は、現在のところ、完成したのではなく、問題が全然ないわけではないが、長年に渉り蓄積されてきた海軍専門用語の特質を明示している。この海軍専門用語の一覧と解説は、添付で報告することにする。

ロシアで働いていた、あるいは、ロシア海軍に勤務していた、外国の専門家集団の言葉には、職人と海員たちの職業的専門用語に移行したものが少なからずあるが、ごく一般的で、標準的なロシア語になったものもある。広く知られている「кавалер」(総員上甲板、総員作業)という専門用語は、英語を起源とする語で、「cover」と「all」という言葉から来ている。すなわち「все наверх」(「総員甲板へ上がれ」)という意味の命令語である。しばしば、このような命令が出されるのは、投錨、拔錨

の時、あるいは、繫索の時、船渠への出入り、展帆、あるいは、船上で整理整頓が行なわれる時である。同様に、「кавалер」は、船の総員で行う作業をも意味している。

ロシア海軍でしばしば使われている語に「попугай」(ポプガイ)というのがあるが、これは、明らかに、英語の「fall under」から来ている。ロシア語に翻訳すると、文字通り「галдай вниз」(「落ちるぞッ」となる。本来は「上から物が落ちるぞ、気をつける」の意味だが、現在は警報を意味する。帆船時代、そのように命令され、マストや帆桁からこの言葉が投げかけられた。マストや帆桁には操帆作業をしている船員がいたからである。

今日に至るまで、ロシア海軍では、そして、もちろん陸軍においても、上官からの命令に対して答える、ある短い言葉の伝統が続いている。それは、「есть」という言葉である。これは、疑いなく明らかに、イギリス海軍が、同様の場合に答える習慣、「yes」からきている。通常のロシア語の肯定語は「да」である。

«камбуз»は船の食事室を指すが、初めは、船首にある煉瓦あるいは、鑄鉄の厨炉を指した。「камбуз」という言葉自体は、オランダ語起源を持ち、(オランダ語の«kombuis」から)、文字通り、船の食事室をさす。

«банка» (bank, 甕、壺、瓶、暗礁、洲、堆) という言葉は、海軍では、入れ物とは関係がない。現代の海軍用語では、海底の盛り上がりや指すと同時に、船の漕座も意味する。さらには、二つの意味があり、帆船の舷の砲の間の場所と、艦の病室の寝板を指す。насыль (mount, embankment, 堤、堆)、『отмель (sandbank, 暗礁、洲、堆)』、『скамья (bench, ベンチ、腰掛)』を意味する英語の bank に由来する。

海軍文書や海軍文献でしばしばお目にかかる「кютик» (マストの先端の索を通すところのこと) という言葉も広く知られている。「кютик»は、マスト上部先端の太い補強部分で、球体を押しつぶした形に似てお

り、帆船時代に存在し、マストの木質を腐敗から守るためのものである。オランダ語の《kloof》の翻訳語で、《шар》(球、目)とか、《набальшник》「杖の頭」を意味する。

しばしば、海軍専門用語は、それを知らない人を途方に暮れさせる。例えば、海軍では、誰でも知っているに違いない言葉、《веселка》(吊腰掛、足場)をご存知だろうか。何かの修理、あるいは、塗装作業をするために、マストを登ったり、船の舷外側を降りる時に使われる装置のことである。

海軍では了解されているにもかかわらず、一般には必ずしもいつも理解されるとは限らない言葉に《выстрел》(船架、支架)がある。ここでは、銃の使用には全く関係なく《выстрел》は一般的に「射撃」「射撃音」「射程」を意味する)、木製、あるいは、金属製のビーム、梁のことで、特殊な継手蝶番で船舷に固定するものである。投錨する時は、小型船やランチが錨留され、抜錨する時は、この装置は上げてしまう。

《утка》(舷側の仮繫索 [flat, cavil, kevel, 耳形の索留め])は水鳥とは全く関係がなく、雁・鴨科の総称をも意味する)、突起の二本ある小さな板で、船の綱、ロープ類(つまり細い繫索)を繋ぐためにある。索具は八本撻り索で《утка》に繋がれ、摩擦の力で、繫止する。

はつきりしないということでは、他に負けないのが、恐らく、《опить склянки》(《склянка》《склянки》を打つ)の意)という表現であろう。この言い方は、その起源を船上で時刻を計るのにガラス製砂時計が使われた時代に遡る。その砂時計をロシア海軍では《склянки》【《склянка》は半時間ごとの時鐘、点鐘。半時間。複数になった《склянки》は砂時計】というのである。この砂時計に合わせ、当直は、一定時間ごとに決まった回数だけ船時鐘を打ち、まさにこのことにより、当直終了まで、どれだけ残っているか、を示すのである。ガラスの時計は、とうに金属製に

取って代わられたが、時鐘を《склянки》により打ち、それを《опить склянки》と呼ぶ習慣は、そのまま残ったのである。

二〇〇年もの間、ネヴァ河口からコトリン島までの水域を船員たちは、《Маркизова гужа》(「侯爵の水溜り」の意)と呼んできた。この表現はしばしば文学に見られるが、時に文書館文書にも見られる。その歴史は、ロシア海軍の指揮を侯爵デ・トラヴェルセ提督がしていた時期にまで遡る。

同提督はもともとフランス人である。トラヴェルセは、一八〇九年から一八二八年まで、最初は海軍省長官、後に、海軍大臣を務めた。ロシア海軍のために、トラヴェルセは少なからぬ貢献をするが、この時期こそが、まさに、ロシア船員たちが、遠洋航海や世界周航を何度もした時期であると言っても過言ではなく、その中には、南極発見も含まれている。しかし、侯爵に好意を持たない者は、侯爵が、自己の主たる目的を正規の海軍を保つことと考え、それ故、コトリン島より先には船を出すことを許さないうちで、そのようなわけで、フィンランド湾のこの部分は《Маркизова гужа》と呼ばれている。

さらにひとつ、海軍関係史料にしばしば見られる特質は、何人かの将校の姓の後に付く、数字の I, II, III...である。(例えば、ペトロフ二世、とか、イワノフ四世、とか)。この幼長を示す数字は、初期の段階では、上級将校の地位が、ひとつの家系、ひとつの出自に、独占されていることを意味している。これは、同姓間、あるいは、親族間で、最初に士官位を授与された者以降の順序を示すための番号である。

そのような運用の仕方は、特に、当該士官たちが同じ艦船、あるいは、同じ艦隊での勤務を経たような場合、混乱の可能性を排除することができた。ソ連時代、そのような数字は廃止された。

海軍用語の内、特異でありながら、なおかつ、広く一般的に用いられ

るものに、海軍の隠語がある。この語の出現は、極めて特殊であり、興味深い、それ故にこそ、隠語は、海軍文書館文書にはあまり登場せず、今回は言及しない。さらにまた、このテーマは、実質的に、尽きることがないのだから、なおさらである。

ロシア国立海軍文書館に文書史料に、もっともしばしば見られる海軍用語について、以下に添付で報告する。

(翻訳：有泉和子)

海軍文書館文書に最もよく見られる海軍専門用語 (抜粋)⁽²⁾

● Адмиралтейств-коллегия

(Department of the Navy (米), the Admiralty (英)、海軍省)⁽³⁾

ロシア海軍関係諸機関の最高官庁。一七七八年ピョートル一世により創設。その機能は変遷しているが、主として、軍艦建造、武装機装、港湾、運河の建設、海軍士官の養成等を行う。一八〇二年には Морское министерство に改組。Адмиралтейств-коллегия に並んで、Адмиралтейский департамент (一八〇五—一八二七) も存在、後者は、主として、官房総庁の役割を果たす。一八二七年、Адмиралтейств-совет に改組、一九一七年まで続く。

● Адмиралтейств-совет

Адмиралтейств-коллегия 参照。

● Адмиралтейство

(Admiralty, 海軍省の建物、海軍工廠)

軍艦建造の中心拠点。一七世紀末から一九世紀、ロシアでは、ポロネ

ジ(二六九五—一七一)、Санкт-Петербург、セヴァストーポリ、ニコラエフ、クロンシュタットにあった。通常、港湾、出港に便利な河岸にある。例えば、主たるものである、Санкт-Петербургの総海軍工廠は、ネヴァ河の左岸にあった。一七〇四—一八四四年、同所で建艦が行われ、ついで、海軍統轄諸機関が配置された。

● Адмиралтейский департамент

Адмиралтейств-коллегия 参照。

● Аншеф-командующий

Главкомандующийと同じ。ピョートル大帝時代の陸軍最高司令官。

● Арсенал

(Arsenal, Арму, Арн Factory, 造兵廠)

軍事官庁のひとつ。武器弾薬の保管、修理、組立、会計、検査、登録、部隊への補給の任を帯びる。

● Боканы (или шлюп-балки)

船舷から外に張り出したビーム、角材で、ボートの吊架。

「ボートを吊るす鋼材、船尾の滑車付角材」⁽⁴⁾

「舷外浮材、アウトリガー(カヌーの安定用浮材)、救命ボートを吊るす舷外張り出し材」⁽⁵⁾

● Бом

бом-бран-стенга (royal mast, ロイヤルマスト、最上檣) に付属する

帆 (парус)、索具、ロープ類(前二者とも снасти)、ロープ等索類、滑

車(テークル)(前二者とも *takelak*)、すべての名前に付く語。

● **Вом-брам-стеняга**

(*royal mast, ロイヤルマスト、最上櫓*)

брам-стеняга (topgallant mast, トゲルンマスト、上櫓) に継ぐマスト。

【マストの内、下から四番目。マストの内、最上部であることが多い。】

● **Брам**

брам-стеняга (topgallant mast, トゲルンマスト、上櫓) に付属する帆(*парус*)、索具、ロープ類(*снасти*)、ロープ等索類、滑車(テークル)(前二者とも *takelak*)、すべての名前に付く語。

● **Брам-стеняга**

(*topgallant mast, トゲルンマスト、上櫓*)

стеняга (topmast, トップマスト、中櫓) に継ぐマスト。

【マストの下から三番目の部分】

● **Вахта**

(*Watch, 当直*)

一、船上で当直任務に当たる者。(通常三〇分ごと、あるいは、二〇分ごと)。軍艦では、六交代制の当直がある。(午前零時から午前四時、午前四時から午前八時、等々)。当直将校が受け持つ。【普通の船でも四時間交代制が原則】
二、当直時間。

● **Вахтенные**
当直水兵。

● **Вахтенный (шквенный) журнал**

(*log book, 航海日誌*)

艦船の航海日誌。艦船上の出来事、乗艦員の生活、すべてを記すとともに、航海の様子(航路、風向、風力、速度、針路、ローリング、水温、天候、海上の様子、上空の様子、スクリュウの回転、流程、航差、帆の状態、他)も記す。

● **Гвардейский экипаж**

(*the Imperial Guard crew, 近衛海兵団*)

アレクサンドル一世により創設、時期は一八二二年のナポレオン戦争の頃。ピョートル大帝の «царские свободя» 「皇帝の漕手たち」、宮廷の «свободские и яхтенные команды» 「漕手ヨット隊」にその起源を持ち、代々皇帝とその親族の航海時の護衛にあたる。一九一七年三月まで存続。

● **Гидрографическое управление**

(*Hydrographic division, Hydrographic Agency, Hydrography department, 水路局*)

科学官庁のひとつ。一八二七年設置、Морское министерство (海軍省)の管轄下。一八八五年までの名称は Управление генерал-гидрографа。水路、気象事項を扱う。

● **Литовы**

(bundline, 収帆索、バントライン)

帆を上に掲げるため、帆の下端を引く索具。この **ЛИТОВЫ** により帆を上げることを **ВЗЯТЬ НА ЛИТОВЫ** と云う。

【横帆の裾に取り付けたロープで、これを引くことによって、帆の裾を吊り上げ、帆を縮帆、あるいは、畳帆する】

● **Лор**

(一) 船の二番目のマスト【つまり **mammasi**, メインマスト】。

(二) メインマストの一番下の帆。

● **Лор-ручелн**

船体の舷外部に甲板の高さに合わせて設けられた張り板。メインマストに対している。

⁽⁶⁾ **Лусельн** とは、静索の斜度を拡大するため舷側に固定している突出部】

● **«Лор и фок — на литовы»**

(「フォア、メイン、絞れ」の意)

フォアマスト、メインマストの帆を畳帆する、あるいは、帆の面積を縮める時の掛け声。

● **До места**

(「場所まで」、**To the place**) の意。掲揚)

帆、あるいは、旗を掲げる際、しかるべき所まで掲げることを意味する省略語。

● **Дрейф**

(drift, driftage, leeway, 風落、流落、流程)

【(一)】風、潮流により、船が本来の進路からずれること。

【(二)】帆走をやめて、一箇所に停船浮遊状態に入ること】

● **Дрейфовать**

(動詞)

(**To drift**, 流程をせる、浮遊をせる)

【(一)】風あるいは潮流の動きに艦船を任せること。

【(二)】「浮遊」に入った場合は、艦船が前進運動をしないように帆を設定する。そのためには、帆を、その一部は風を受けて艦船が前に進むように、一部は後に進むように配置し、このことにより、事実上艦船はほとんどその場に留まったままとなる。【海上で船を「停船状態」にするためには、風および、潮流の力に逆らうことが必要となる】

● **Императорская яхта**

(**The Imperial yacht**, 帝室ヨット)

一七世紀後半、海軍高官用に **адмиралтейские яхты** (**the admiralty yachts**) (提督用ヨット) が造られるが、同時期、政府高官、皇族のパレード用も造られる。

● **Килевание**

点検、修理を目的とし、船を傾けること。水上にキールを出すまで傾けたことに由来する。同義語に **крепование** があるが、これは傾けるが、キールは水上に出さない。

● **Коммерц-коллегия**

(the Department of Commerce (米), the Board of Trade (英), 商務省)
省庁のひとつ、一七一一五年設置。初期は、通商、特に対外貿易、海運、商務諸事項の対処を扱う。

● **Крюйс**

бизань-мачта (mizzenmast, ミズンマスト) に付属する帆 (парус)、索具、ロープ類 (снасти)、『ロープ等索類、滑車(テークル)』(前二者とも такелаж)、『すべての名前に付く語。』

● **Маре**

мачта (帆) 参照。

Top board, トップ台。甲板からマストを登って(実際には繩梯子であるシユラウドを登る)、最初にある踊り場。一番下のマストをロワマストと言ひ、下から二番目のマストをトップマストと言うが、ロワマストとトップマストの間にあるのが、この踊り場。Салинг (ゲルン台) 参照】

● **Марса**

Марсель (top-sail, トップスル) に付属するものすべてに付く語。

● **Марса-фал**

Марсель (top-sail, トップスル) を補強する часть (道具、索具、ロープ類)。

● **Марсель**

(top-sail, トップスル、中檣帆)
下から二番目の帆。марса-реи (topst¹ yard, トップスルヤード)、нижний реи (lower yard, ローヤーード) の間に付ける【つまりトップマストに付けられる】。このマストにつけられているかにより、名称が分かれ、『фор-марсель (fore-top-sail, フォア・トップスル)』、『прот-марсель (main-top-sail, メイン・トップスル) の如く用いる。』

● **Марсовои**

Маре (檣楼、トップ台) マルスで働く水兵。

● **Мачта**

(Mast, マスト)

基本的に、帆船には、三本のマストがある。一番前が фок-мачта (foremast, フォアマスト、前檣)、真ん中で一番高いのが прот-мачта (mainmast, メインマスト、中檣)、後ろが бизань-мачта (mizzenmast, ミズンマスト、後檣)。【最高六本まで。四本のもが多く、前から foremast, mainmast, mizzenmast, jiggermast (ジガーマスト)】

二本あるのは、『三本を繋ぎの стеньга (topmast, トップマスト、中檣)、грам-стенга (topgallant mast, トゲルンマスト、上檣) がある。【大型帆船の多いものは、四本のマストを順に繋ぎ、下から順に、最下部を lower mast, ロワマスト、下檣、二番目を topmast, トップマスト、中檣、三番目を topgallant mast, トゲルンマスト、上檣、一番上を royal mast, ロイヤルマスト、最上檣という】各マストの継ぎ目部分には、小さな踊り場がある。下から марс 次が салинг という。【日本語では檣楼、檣頭横材だが、普通あまりそうは言わない。普通は、前者 марс は「トップ台」

後者 *салниг* は「ゲルン台」という。いずれにせよ、現在、帆船、あるいは、船舶関係の名称で、「難しい」漢字名称を使うことはほとんどなく、英語のままの片仮名名称を使う。以下「帆」の項目も同様。】

● **Мокрая провизия**

(*Wet provisions*, 「濡れた食料」)
帝政ロシア海軍において、酒、酢、油脂、魚、肉等を指す。

● **Морской агент**

(*naval attaché to an embassy (a legation)*)、在外公館付海軍武官
現在の *военно-морской атташе* 【*naval attaché*】

● **Морской устав**

(*Naval regulations*, 海軍操典、海軍法典)
一七二〇年制定。ロシア正規海軍の編成原理、海軍構成員の訓練と教育の方法、海上戦闘の遂行方法を定めた規則集。

● **Мостик**

(*bridge*, 船橋、ブリッジ)
上甲板の上に高く設置された台状の空間。艦船の操縦機器がすべてここに集約され、艦船の走行時には、普通、艦船長がそこにいる。

● **Палуба**

(*deck*, 甲板)
船体の水平方向の覆い。船舶全体を上から覆うもの(上甲板)と、内部を何段かに区切り、生活空間、動力機関、装備品、機関等の配置場

所を作るためのもの。

● **Парус**

(*sail*, 帆)

帆の種類には *прямые паруса* (*square sail*, 横帆) と *косые паруса* (*for and aft sail*, 縦帆) がある。

横帆は、ヤードに取り付けられ、帆の形状は台形、船の中心線と交わる形に配置される。下の隅には *снасти* (*tackle*, 索具) があり、展帆する時引くものを *шкоты* (*sheet*, シート)、畳帆する時のものを *пиговы* (*buntline*, バントライン)、収帆索と云う。

【横帆船の横帆の内】一番下の帆が【フォアマストで】*фок* (*fore-sail*, フォア・スル)、【メインマストで】*грот* (*main-sail*, メイン・スル)、真ん中が *марсель* (*top-sail*, トップスル)、前から順に、フォアマストが *фок-марсель* (*fore-top-sail*, フォア・トップスル)、メインマストが *прот-марсель* (*main-top-sail*, メイン・トップスル)、*бизань-мачте* (*mizzen-mast*, ミズン・マスト) が *крюйсель* (*mizzen-top-sail*, ミズン・トップスル)。その上が *грамсель* (*torgallant-sail*, トゲルンスル) で、前から順に *фор-грамсель* (*fore-torgallant-sail*, フォア・トゲルンスル)、*прот-грамсель* (*main-torgallant-sail*, メイン・トゲルンスル)、*крюйс-грамсель* (*mizzen-torgallant-sail*, ミズン・トゲルンスル)。下から四番目が *бом-грамсели* (*royal*, ロイヤル, 最上檣帆)。【従って、前から順に *фор-бом-грамсель* (*fore-royal*, フォア・ロイヤル)、*прот-бом-грамсель* (*main-royal*, メイン・ロイヤル)、*крюйс-бом-грамсель* (*mizzen-royal*, ミズン・ロイヤル) となる】

【より正確には、*full rigged ship* で、*foremast* が下から *foresail*, *lower-fore-top-sail*, *upper-fore-top-sail*, *lower-fore-torgallant-sail*, *upper-fore-torgallant-*

sail, fore-royal, fore-skysail, mainmast が 下 か の mainsail, lower-main-top-sail, upper-main-top-sail, lower-main-topgallant-sail, upper-main-topgallant-sail, main-royal, main-skysail, mizzenmast が 下 か の crossjack, lower-mizzen-top-sail, upper-mizzen-top-sail, lower-mizzen-topgallant-sail, upper-mizzen-topgallant-sail, mizzen-royal, mizzen-skysail と なる。帆船の形で違つ】

一方、縦帆は、船と平行、船の中心線に沿つた形で置かれる。

【横帆船の持つ縦帆の内】三角の帆が cracker (staysail, ステースル) 【全部 拳びる】 main-staysail, main-topmast-staysail, middle-staysail, main-topgallant-staysail, main-royal-staysail, mizzen-staysail, mizzen-topmast-staysail, mizzen-topgallant-staysail, mizzen-royal-staysail がある】と 云ひ ける (船首の三角帆) 【全部 云ひ ける】 フライイング・ジブ、outer-jib, アウター・ジブ、inner-jib, インナー・ジブ、fore-topmast-staysail, フォア・トップマスト・ステースルがある】で、ステイとヤードに取り付けられる。四角の帆が грисель (trysail, トライスル) で、前から順に fop-грисель (fore-trysail, フォア・トライスル) 、por-грисель (main-trysail, メイン・トライスル) 、бизань (mizzen-trysail, ミズン・トライスル) と なる。【トライスルは悪天候用の帆、悪天時、取り扱いが簡単で、帆から風を抜くにも тке up するもの簡単。かつて、trysail-mast, トライスル・マストというトライスルを展開するために foremast, フォアマストや mainmast, メインマストの後方に取り付ける小型マストがあった】

● **Ранопр**

(report, 軍務報告書)
公式の口頭または、書面による軍務報告。下位から上官に宛てるもの。

● **Ревизор**

【Inspector, 本来は検閲官の意味で使う】
乗艦将校のひとつ。艦船の経理部門の管理をする。

● **Салпинг**

мачта (帆) 参照。

【gallant board, ゲルン台。甲板からマストを登って(実際には縄梯子であるシユラウドを登る)、二番目にある踊り場。一番下のマストをロワマスト、下から二番目のマストをトップマスト、三番目のマストをトゲルンマストと言つが、トップマストとトゲルンマストの間にあるのが、この踊り場。Маре (トップ台) 参照。】

● **Сигнальщик**

(Signalier, Signaler, 信号手、信号水兵、合図当直水兵)
当直水兵のひとつ。船の周囲で起きていることすべてを監視し、合図(あるいは、信号)を出したり、受けたりする任務を帯びる。

【cf. сигнальный флаг = signal flag (艦船の信号旗) 、 сигнальный флажок = signal flag (信号用手旗)】

● **Стеньга**

(topmast, トップマスト、中檣) 、
マストを継ぐための木 【トップマスト、つまり、下から二番目のマストのこと】。従つて、どのマストにも、この言葉の付く名称はある。
fop-стенга (fore-topmast, フォア・トップマスト) 、 por-стенга (main-topmast, メイン・トップマスト) 、 крьюйс-стенга (mizzen-topmast, ミズン・トップマスト) の如し。Стеньга の上は брам-стенга (topgallant mast,

トゲルンマスト、上檣)。

【下檣の上に継ぎ足したトップマスト、中檣】⁽⁷⁾

【漢字を使う日本語名称だと、topmast, トップマストも mainmast, メインマストも両方とも「中檣」というため注意が必要】

●Фертонни

(mooring, or, mooring with stem way, 双錨泊, riding moor, (後進双錨泊) riding moor, (前進双錨泊))

二個の錨を下ろしての停泊。必要とする位置に船を停泊させるための方法。干満の流れが激しい時、風向が変わりやすく影響を受けやすい時、あるいは、隘路で行う停泊方法。船が動きにくくなる。【まず、第一錨を下ろし、後進して下がり(あるいは、前進し)、第二錨を下ろして停泊させる】

●Фок

【(一)】foremast, フォアマストの一番下の帆。

【(二)】「Jibシブ」【ジブとは、船首に張る三角帆のこと。head sailの一種。代表的なものは、dying-jib, フライイング・ジブ, outer-jib, アウター・ジブ, inner-jib, インナー・ジブ, fore-topmast-staysail, フォア・トップマスト・ステイスル等があるが、船種により、さまざま。他の帆に比べ大きくはないが、船首にあるため、船を回頭させる時、真つ先に操作させる重要な帆であり、航走中は、針路を安定させる役割を果たす。最前方にあるため、これがはためく様子が、操舵員の針路修正の目安ともなる。帆 (Парус) の項目も参照】

●Фока

フォアマストに付属するものの名称に付ける言葉。索具 (снасть)、帆 (парус)、檣、帆桁、防材等の丸材 (すべて рангут) の前に付ける。例えは фока-реи (fore-yard, フォアヤード) の如し。

●«Шабаш!»

漕ぐのを止め、櫂を船にしまう時の掛け声。「漕ぎ方やめッ」。

●Шлюн-балки боканы 参照。

●Шлюпка⁽⁶⁾

(boat, launch, whaleboat, etc. 端艇、小艇、舟艇)
一般的に漕ぐ船をいう。次のようなタイプがある。

○Барка 最も大きい。櫂は一八〜二四本。

【(一)一六〜二〇櫂の単檣大型帆船(二)ランチ、港湾内補助艇(三)河川用木造運搬船】

○Катер 櫂は二二〜一六本。

【小型船艇、ランチ。cf. пожарный катер, 消防艇, быстроходный катер, 快速艇, моторный катер, мотор-порт, строжевой катер, 巡視船, торопедный катер, 魚雷艇, катер на подводный крыльях, 水中翼船】

○Вельбот 軽い快速の小型船艇。船首と船尾が尖っている。櫂は両側に五、六本ずつ【つまり、漕手が五六人の意】。

【帆を備えた四から六人漕の快速ボート。昔は捕鯨用】

○Личка 軽く幅が狭く長い舟。漕手は四〜六人。

○Четверка 櫂四本で漕ぐ舟。

○Двойка 二人で漕ぐ舟。

●Шпигат

舷または甲板上の排水溝。

●Штаб-офицеры

(完全に直訳すると「Staff officers, 幕僚、参謀」となる)

革命前のロシア陸海軍で、佐官階級を指す。полковники【colonels, 陸軍大佐】、подполковники【lieutenant colonels, 陸軍中佐】、海兵隊中佐【капитаны первого и второго рангов【the captains of the first and second ranks, 海軍大佐、海軍中佐】を言う。

●Якорная стоянка (место)

(road, roadstead, 碇泊地、錨地、水脈)

沖合、あるいは、港湾内での船の碇泊場所。ひとつあるいは、二個の錨を下ろす。

【open roadstead, 波浪に曝される沖合の碇泊地、good roadstead, 波浪の影響を受けない沖合の碇泊地がある。Cf. anchorage, 碇かきが良い、船舶の碇泊に適する場所 = anchor ground, Anchorage (マラスカ州南岸の都市名)】

●Якорь

(anchor, 錨、碇)

艦船を碇泊させるもの。時代によりさまざまな形状、名称がある。

○Становой якорь 最も重く、長時間の碇泊に用いられる主錨。

○Асри 主錨より小さい碇で、錨地で方向転換をする時、小碇泊用。【通常船尾に格納する】⁽¹⁰⁾

○Мертвый якорь

「死錨」の意。水底にしつかりと固定された錨。錨から太い鎖で繋がれた樽が水面に浮んでいて、その樽に付いているリングに艦船を繋ぐ。

【ブロックハウスによると мертвый якорь は、上記以外に「係留用の樽。ブイを支えるためのもの」、「рейд (錨地、停泊地)」、гавань (港) の設備」とある。(Новый энциклопедический словарь, «Ф.А.Брокгауз-И.А.Эфрон», СПб, 1910-1916, Энциклопедический словарь Ф.А.Брокгауза И.А.Эфрона.СПб.:Брокгауз-Эфрон. 1890-1907.)】

【Kedge anchor, 小錨 中碇の二分の一の重さで、通常船尾付近に備え、中錨とほとんど同じ目的で使われるが、中錨を使うほどではない時に用いる。stream anchor, 中錨 主錨の三分の一の重さで、振り回し防止、船の向き変更、離洲、離礁その他の目的で使用する。】

【sea anchor, 海錨 水中に浮遊させ、水の抵抗により、船首に対する波風の影響を少なくさせることを目的に、船首、あるいは、船尾より流す、一種の帆。構造は、帆型、帆布の袋型等がある。円材、ロープ、錨鎖で代用すること】

軍艦の型⁽¹¹⁾

●Бриг (brig, ブリック艦)

(英語の brig, イタリア語の brigantino の略称から)

一八一―一九世紀の二本マストの帆船。二本のマストに横帆 (прямая паруса) 【square sail】を付ける。上砲列甲板 (открытая оружейная палуба (дек)) 【open gun deck】に一〇―二四門の大砲を備える。大砲が置かれるのは、その甲板のみである。偵察、哨戒、巡洋、通報、通信任務をし、同様に、商船の護衛に用いる。

● **Броненосец** (armoured battleship, 装甲戦艦)

一九世紀後半から二〇世紀の主力級の戦艦。大口径砲の砲塔と強力な装甲防衛装備を持つ。Броненосецは海軍の主力攻撃力である。今日、もっとも大きく、威力のある軍艦である。海戦で、敵の装甲艦と沿岸要塞への攻撃に用いられる。ロシア海軍では、艦隊装甲艦(艦隊構成要員として外洋海戦に参加)と沿岸警備用装甲艦(沿岸作戦用)に分かれる。

● **Клипер** (clipper, クリッパー艦)

(英語の clipper, あるいはオランダ語の klipper より。動詞 clip「切る」より派生)

一九世紀の三本マストの快速帆船、あるいは、快速スクリュー機帆船。偵察、哨戒、巡洋、通報任務を担う。上砲列甲板(открытая орудийная палуба (дек)) 【open gun deck】に最大二四門の大砲を備える。

● **Корвет** (corvette, コルヴェット艦)

(フランス語の corvette から)

一八一―一九世紀の帆船。三本マストの快速砲艦。偵察、哨戒、通報任務を負うほか、種々の補助任務を帯びる。一九世紀後半、コルヴェットは、上砲列甲板(открытая орудийная палуба (дек)) 【open gun deck】に二―三二門の大砲を備える。一九世紀半ばには、蒸気外輪コルヴェット(蒸気コルヴェット)、やがて、スクリュー・コルヴェットが登場する。

● **Крейсер** (cruiser, 巡洋艦、クルーザー)

(オランダ語の kruiser より。動詞 kruisen, すなわち「巡航する」より派生。)

軍艦。敵の軽量級艦隊との海戦、艦隊、護衛艦隊の護衛、海軍陸戦隊の上陸支援、沿岸陸上部隊への援護砲撃、沿岸の敵の通信を妨害、水雷障害物の設置、その他の任務を担う。ロシアでは一八九二年から一級巡洋艦(装甲巡洋艦と防護巡洋艦) (броненосные и бронепалубные) 【armoured cruisers】 【protected cruisers】と二級巡洋艦(軽巡洋艦) (легкие крейсера) 【light cruisers】に分けられた。世界各国の中には、大型水雷艇(Большие миноносцы) 【large torpedo boats】を水雷巡洋艦(минные крейсера) 【mine cruisers】と呼ぶことがある。

● **Линейный корабль** (линкор) (line of battle ship, 戦列艦)

一七一―一九世紀の帆走軍艦。帆船中、最も大型。三本マスト、二、三層の下層閉鎖砲列甲板(закрывые артиллерийские палубы (деки)) 【closed gun deck】を持つ。大砲は六〇―一三五門備える。初期に於いては、海戦を行う際、縦列艦隊(戦闘ライン) 【being located in the wake column (line of battle)】中にあり、そこから縦列の船 【line of the ship】と名づけられ、蒸気艦時代になっても、その呼び方は引き継がれた。海軍が蒸気艦艇時代に入ると、水上航行砲艦として、大きさでは最大級の軍艦のひとつとなり、基本級の軍艦となった。海戦に於いては、すべての等級の艦艇の駆逐の任を帯び、沿岸目標物への砲撃に大威力を発揮した。ドレットノート級の軍艦が出現したのは、世界各国海軍とも、日露戦争(一九〇四―一九〇五)後であり、Броненосец(装甲戦艦)に代わられた。ロシアで戦列艦級の名称が設けられたのは一九〇七年。

● **Монитор** (monitor, iron clad, gun boat, モニター艦)

(英語 monitor, モニターより)
沿岸防衛戦を想定する装甲砲艦。沿岸、あるいは、河川での戦闘用の

砲艦。最初のアメリカ装甲艦「モニター号」から名付けられる。

●Тендер (tender, cutter, テンダール艦)

(英語 tender より。動詞 tend 「向かう」、「行く」より派生)

一九世紀の一本マストの帆船。通報、巡洋、偵察任務を帯びる。上砲列甲板 (открытая батареинная палуба (дек)) 【open gun deck】に六一二門の大砲を備える。

●Фрегат (frigate, フリゲート艦)

(オランダ語 fregat, フランス語 frégate, イタリア語 fregata より)

三本マストの戦艦。一、二層の下層閉鎖砲列甲板 (закрытые батареинные палубы (деки)) 【closed gun deck】を持ち、大砲は、同甲板上に、最大六〇門。Линейный корабль 【battle ship】より速い。主たる任務は、通報、偵察任務。一九世紀半ばには、蒸気外輪艦艇、後に、スクリュー艦が登場する。装甲しているものもある(装甲フリゲート)。帆走フリゲートはクリミア戦争(一八五三—一八五六)で使用される。

●Шлюп (ship, シップ型帆船、スloop艦)

(オランダ語 sloep より。オランダ語動詞 sluipen 「忍び寄る」より派生)

一八一—一九世紀の三本マストの帆船。軍船、商船。横帆を持ち、コルヴェットとブリックの中間の大きさ。上砲列甲板を持ち、偵察、哨戒、巡洋、通報任務を帯びる。

●Шхуна (schooner, スクナー艦)

小型艇、二本、あるいは、三本マストで沿岸航海用。

●Шхуна шхуна 参照。

●Яхта (yacht, ヨット)

(オランダ語 jacht より。動詞 jagen 「追撃する」より派生)

ヨーロッパに登場したのは一六世紀の末。基本的には行楽用。後に、軍用に用いられ、偵察、通報任務を帯びる。

海軍の職階⁽¹²⁾

(19世紀半～20世紀初)

職階名称	年代	相応陸軍職階	註記
Гардемарин (1860-1882— Гардемарин флота, 1906-1907 — корабельный гардемарин) 士官候補生 (1860-1882年 は Гардемарин флота と表記、 1906-1907は корабельный гардемарин と表記)	1716-1917	Юнкер, 士官候補生、 Прапорщик, 歩兵少尉補 【Корнет, 騎兵少尉補】	士官候補生は、本質的に、 士官に昇級する前の乗艦見 習実習生。
Мичман 海軍少尉	1713-1917	Подпоручик, 陸軍少尉 Поручик, 陸軍中尉	1713-1732年、1751-1758年は 下士官の地位に相当、その 他の期間は、最下位の士官 に相当。
Лейтенант 海軍大尉	1701-1917	1701-1907年は Капитан, 陸軍 大尉、1907-1917年は Штабс- капитан, 陸軍歩兵二等大尉 【Штабс-ротмистр, 陸軍騎兵 二等大尉】	
Старший лейтенант 海軍上級大尉	1907-1917	Капитан 陸軍大尉 【Ротмистр, 陸軍騎兵大尉】	
Капитан-лейтенант 海軍少佐	1713-1855, 1907-1911	Майор 陸軍少佐	
Капитан 2-го ранга 海軍中佐	1713-1732, 1751-1917	Подполковник 陸軍中佐	1732-1751年 は «Капитан корабля» と名称変更
Капитан 1-го ранга 海軍大佐	1713-1732, 1751-1917	Полковник 陸軍大佐	1732-1751年 は «Капитан корабля» と名称変更
Капитан-командор 准将	1707-1732, 1751-1827	Бригадир 准将	1764-1798年 は «капитанов генерал-майорского», «бригадирского звания» と 名称変更
Контр-адмирал 海軍少将	1699-1917	Генерал-майор 陸軍少将	海軍将校だが、陸上勤務に 転入された者。同様に、海 軍省庁に配属され、陸上勤 務をする者。
Вице-адмирал 海軍中将	1699-1917	Генерал-лейтенант 陸軍中将	海軍将校だが、陸上勤務に 転入された者。同様に、海 軍省庁に配属され、陸上勤 務をする者。
Адмирал 海軍大将	1699-1917	Генерал рода войск 陸軍各兵科の大將 【歩兵、騎兵、工兵、砲兵、 それぞれ名称が違う、の意。 Генерал от артиллерии (砲兵 大將)、Генерал от инфантерии (歩兵大將)、Генерал от кавалерии (騎兵大將)】	
Генерал-адмирал 海軍元帥	1708-1908	Генерал-фельдмаршал 陸軍元帥	最初は職階、後に、海軍お よび海軍省トップの名誉職。

(翻訳：有泉和子)

XVIII-начало XX, СПб, 1999.

〔翻訳者注〕

- (1) 原語ロシア語に対する英語訳語添付はすべて翻訳者。以下同様。
- (2) 抜粋基準は訳者による。本文で挙げられている用語、後出されている階級、職階、船種、及び、日本語としてなら、通常、たれでも常識で知っているはずのものは、すべて省いた。
- (3) 英訳すべて翻訳者。英訳、及び、【】内の訳者補注は、主として浅井栄資編『英和海事大辞典』(成山堂書店、一九七二年)、航海訓練所・運航技術訓練会編『航海図鑑』(海文堂、一九七〇年)、Энциклопедический словарь Ф.А.Брокгауза и И.А.Ефрона. СПб.: Брокгауз-Ефрон. 1890-1907, Новый энциклопедический словарь, Ф.А.Брокгауз-И.А.Эфрон, СПб, 1910-1916, Большая советская энциклопедия 3-изд., Советская энциклопедия, М., 1969-1978, Русский военно-исторический словарь, В.Г.Краснов и В.О.Дайнес М., 2002, www.fdot.com.による。特に『航海図鑑』は詳細で、なおかつ、すべてに英語による名称が書かれ、極めて使い易い。
- (4) 井桁貞敏編『コンサイス露和辞典』(三省堂、一九七一年)の記述。
- (5) 東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編『研究社露和辞典』(研究社、一九八八年)の記述。
- (6) 『研究社露和辞典』の記述。
- (7) 『研究社露和辞典』の記述。
- (8) 『研究社露和辞典』の記述。
- (9) 以下、この項目中「」内の補注はすべて『研究社露和辞典』の記述。
- (10) 『研究社露和辞典』の記述。
- (11) 以下、名称の英訳は翻訳者。
- (12) 翻訳するにあたっては、以下の文献を参照した。井桁貞敏編『コンサイス露和辞典』(三省堂、一九七一年)、東郷正延編『ロシア・ソビエトハンドブック』(三省堂、一九七八年)、東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編『研究社露和辞典』(研究社、一九八八年)、藤沼貴編『研究社和露辞典』(研究社、二〇〇〇年)、Д.Е.Шептёр. Чинновний мир России.